テレビありがとう

私たちの贈物に喜ぶ子供たち

年末年始の助け合い運動で大地評は昨年、瀕幸な孤児たちに暖い手を差しのべようと、甘木山学園へ組合員から寄せられたカンパの一部を割きオルガンとブランコを贈つた。園長さんはじめ子供達の喜びは非常なものであつたが、今年は子供たちの渇望の的であつたテレビを正月あけ早々寄贈した。画面に見入る子供たちの顔は不幸な暗いかげをすつかり捨て払つてニコニコ顔である「おじいさんテレビをありがとう」とたどたどしい字だが誠心のこもつた礼状がいま大地評の机の上には十数通とどけられている。

ここ甘木山学園はいま子供たちが五十五名いて園長の石井武乃さんをはじめ、職員の人たちの暖い保護のもとに、すくすくと育つている。以下礼状の中から二、三を拾つてみると……。

三年　田中　時枝

たいちひようのおじさんテレビありがとうございました。わたしたちはまいにちまいにちテレビをみています。おわらい三人組のときみんなとてもわらつていました。かなりやさん、ピノキオとかげきえいがなど、とてもおもしろいのでわたしはずつとわらつていました。まいにちおもしろいのばかりです。すもうのとき、男の人も女の人もみんなすきな人をおうえんしています。よくうつつてとてもおもしろいのです。おじさんがもつてきてくださつたときは、みたくてテレビのそばにひつついていました。

三年　鬼塚　京子

おじさんテレビありがとうございました。わたしはいつもテレビでたのしいです。わたしはまい日テレビをみてテレビはたのしいものだとおもいました。

たいちひようのおじさん、ほんとにテレビありがとうございました

五年　加藤　民子

この前の土曜日、テレビがきたときみんな「わあ、テレビがききた」といつてようこんだ。あの日からだれもがテレビにかじりついている。幼児、小中学生、先生みんなみている。食事のときもみている。その顔はほんとにうれしそうだ。

こんなに毎日テレビをみて楽しくすごされるのは、たいちひようのおじさんたちのためだ、おじさんからだに気をつけておしごとにはげんで下さい。

私もげんきで毎日一生けんめいべんきょうに、うんどうにはげみます。テレビをほんとうにありがとうございました。

吉岡　恭助

大地評のみなさんありがとうございました。みなさんがテレビをもつてきてから、僕たちは毎日テレビをみています。いままでみたので一番おもしろかつたのは「お笑い三人組」でした。僕は学園にきてからテレビをみるのははじめてです。皆さんたちがテレビをもつてきたときは、うれしくてうれしくてたまりませんでした。

僕は心の中で大地評の皆さんありがとうといいました。僕が大きくなつたら大地評の皆さんのように

短歌

再建案許さず

三川支部　今田　光義

炭売れぬ不況のしわを吾々に押しつくす再建案絶対許さず
炭売れぬば会社と政府の責任ぞ再建案とは勝手きわまる
みんなして職場に築きし民主々義保安優先絶対ゆづらず
再建案いでしをみんな怒る時せせら笑いし奴の顔が逃ぐ
再建案のふん満おもい切りぶちまき記者帰りたるのちも余憤
湧きくる

まずしい人や困つている人を助けます。そしてまずしい人々がお金持ちにまけないようにしたいとおもいます。さようなら。

中二　江崎　千賀子

大地評のおじさんありがとうございました。

土曜日のお昼、とつぜんテレビがきたのにはビツクリしました。皆のようことびはどう説明してよいか説明しにくいほどです。テレビをみるときは、いままで一生懸命遊んでいても、静かになつてみます。もしも私たちが自分の家に住んでいたならば、テレビはともかくラジオもきけなかつたにちがいありません。学園にいてよかつたと感謝しています。大地評のおじさんたちには長い間お世話になつております。おじさんたちの贈物はみなすばらしいものばかりです。とてもうれしくてたまりません。

世の中にこんなに美しい人たちがいられるのかと思うと、うれしくなります。

私たちが社会にでたら、きつとおじさんたちのような心の美しい人になるよう努力します。ほんとにどうもありがとうございました。

中二　大坪　正彦

僕たちはもう前からテレビがみたくてたまりませんでした。そうしたある日の午後、日立テレビとかいた小型の自家用車がきたので、「テレビがきたぞ」と喜びましたどこからきたのだろうと思つていたら、大地評からきたとのことです。僕はもううれしくてたまりませんでした。

僕たちは映画をみているような感じでした。このような高価なものをと思うと僕たちは、心の底から有難うという気持ちでいつぱいです。僕たちはこのテレビを大事にして、これを大地評のおじさんたちと思い、一生懸命勉強して、おじさんたちのようになりたいと思います。ほんとにテレビありがとうございました。

中二　金子　樺

大地評の皆さんテレビほんとにありがとうございました。

皆さんたちがテレビをもつてきてから、毎日テレビをみています。

映画

大阪女の意地と情愛を描く文芸映画

花のれん

大阪船場の町並は季節をむかえると活気づくが、その支払いは几帳面で厳しい。大正の末ごろである。そのなかで河島呉服店だけはまだ冬物の新柄の用意もない有様ある。

夫吉三郎のかわりに支払い台の前に座る多加は、つめかける集金人たちに何度も辛い断りを続け精根つきた感じだつた。おまけに朝から金を都合するといつて出かけた吉三郎は、捨バチの気持から行きつけの料亭で芸人遊びに夢中で挙句は無い金をもつて迎えにこいという呑気さである。

ついに河島屋は倒産し。た残つたわずかの金を資本に多加は吉三郎に、死んでも芸人遊びがやめられぬなら、いつそ芸人たちに売つた顔を利用して寄席をやるようにすすめた。吉三郎もその気になりヒイキにしていた芸人のガマロを助手にして天満天神ちかくの汚い寄席を買いとり、第一歩をふみだした。

多加は資金の不足を若高利貸しの石川さんから出資させるとともに、自分は寄席の入口に屋台をしつらえ、冷しアメを売つて立直りに懸命の努力をした。

その甲斐あつて、天満亭は繁昌してきたが、そうなるとまた吉三郎の遊びぐせが頭をもたげ、おしのという妾をつくつてしまい、しかも妾宅で急死してしまつた。

多加は通夜の日、婚礼の際に母がもたせてくれた白い喪服を無意識のうちに着ていた。それがいつしか彼女自身に、浪場の古いしきたり、白い喪服は二度にまみえぬ心の証しとして彼女の心の形をつくり、寄席経営にその生涯を賭けることを誓わせた、以来ひとり子の久雄を女中のお梅に託し商売一筋にかけまわる多加だつたが、そのころ顧客である大阪市会議員の伊藤友衛とふとしたことから知りあい、彼女の心は火のような〃女〃としての熱情にもえた。やがて法善寺の金沢亭も買いとり、四季の花をおぼろ染にした「花菱亭」と染めぬいた花のれんをかかげた。折も折、安来節が関西一円を風ビしかけていた。これに眼をつけ男勝りの腕を発揮した。

(二十五日から太陽館で上映)

短歌帳

おみこしかつぎ

(7)　小山　あきら

×××××××××××××××××××××××××××××××××××××××

ショート　バンツで

人工衛星を回転させた大きな地球をドツカとトラツクにのせ、行進する人々と見物する人々がほほえみを投げる中をどうどうと進んだこと。それから警職法改悪反対統一行動大会のとき、警察官に似せた組合員のおどけぶり。これらは闘う人々はもちろんだが、それを囲む人々の間にその真意となごやかさを伝えただろう。

私はこのぬやまさんの述べたものを読んで「チキショウ、うまいこと云いやがる」と素直にうめいたものだ。と同時に先に述べたように、いまのわれわれの闘争の中にも、そういつた意識の芽がチラチラと見られだしたことを考えるとなにかしら労働者としての喜びとこれからの闘争に大きな眼りと期待が感じられた。

じつさい、われわれの闘いは過去もそうであつたが、今、目前にひかえている闘いのことを考えてみると、これこそぬやまさんがいわれる全国民が統一して闘わねばならない大きな問題がたくさんころがつているんではないか。安保条約改定、核武装反対、原水爆実験反対、勤評、警職法改悪阻止、日中関係打開などと数限りない。そしてまず当面の問題としてじつくり考えていかなければならないこんどの再建反対闘争。これこそ三鉱労組の組合員と家族ばかりでなく広く市民と一緒に闘いをすすめていかなければならないものであろう。それに必要な人々を魅きつける新しいセンスとより進歩した労働者意識をしめした闘争をこれから闘つていくことが求められているのではなかろうか。

先日〃みいけ〃で紹介された〃週間わかもの〃に、面白いことが職つていた。

主幹ぬやま・ひろしさんがある青年の集会に出席したとき、〃ジクザク・デモはいいかわるいか〃という問題がでたというのである。全学連のデモなどのことがでて、その場は反対意見が高まつたそうであるが、そのとき、ぬやまさんがこういつた。読んでみると、「ジクザク・デモはやつてもいいがおれはこんなに勇敢だゾ」ってことを見せびらかすことはいけない見ていて、思わずとびこんでくるようなデモをやりたいんだ。平和のミコシをかついだり、スローガンを書いたでつかい鯉のぼりと吹き流しをたてて、女は全部ショートパンツで参加する。だつてみろよ、天安門の前だつて、モスクワのメーデーだつて、みんな娘たちは水着姿で行進しているじやないか。若い娘と青年たちが平和のミコシ、鯉のぼり、吹き流しをかかげて見事なデモをやる。

すると、見物人が「おれの町内の今年のミコシは国鉄型だ。いや炭労型だ」となつてくる。どうだ、これでこそ労働者階級の指導性がうち立てられるんだ。また、ふだん組合活動に無関心な人々から「こいつはいい」とどんどん集つてくる。そこに彼等の中からすばらしい才能とエネルギーが生れてくるんだ」とこんな内容である。

私たちの過去の闘いの中にもそうした新しいエネルギーのも頭をみることができる。

たしか昨年のメーデーだつた。

ミスター　つるはし　中村かめお

なるほど本棚

新しい女の生きかた

(19)

「日本の主婦」

はげしい資本攻勢の中で、労働者が闘いをすすめるのに主婦の力がどれだけ大切な役割をするか、私たちは数多くの体験で知つています。

二百数十日もの長い間、会社の組織分断工作にも負けずに闘つた王子製紙労組の主婦や、日鋼室蘭の主婦たちは「一人一人は無であり、団結こそすべてです」と叫びながらはげしく闘い続けました。また三池炭鉱の主婦は百十三日の首切り反対闘争を「去るも地獄、残るも地獄」の合い言葉でねばり強く闘いました。

闘いによつて育てられた主婦の力を意識的な活動によつて一層強めなければなりません。そのためにも長い間しいたげられてきた主婦の歴史を知り、組織の実体をみつめて、ふだんから助けあえる主婦になりたいものです。

この本を特に三池のみなさんに読んでもらいたいのは〃夫とともに〃という中に「炭婦協の結成とその活動が他単産の闘争力にあえた影響、労働者と主婦の立場、世界の動き、とこれからの主婦のすすむ道をおしえているからです。

著者は、はしがきの中で「わたくしたちは曇りのない眼をもつて日本の主婦たちの夫である人の姿をながめるならば、そこには低賃金と貧困と失業の危機にさらされている日本の労働者階級の一人を見ることができます」といつています。このことは労働者の妻として、日本の主婦としての方向を自分自身で作りあげなければ、失業と貧困の社会からぬけだすことはできないことを教えているのです。

この書が、かず多くの主婦のみなさんに読まれることを期待しています。

(たていし・たけひろ)

永丘智郎著　三一書房　新書版　一四〇円

ゆき女房

—日本昔ばなし—

その一

むかし、ひとりものの男がありました。ある冬のさむい朝、のきばたからさがつたしがま(つらら)をみて、

「あつたに細くてきれいな女が、おらのよめこになつてきたら、どんなによかべ」

とおもい、おもわず

「どうかして、あつたらよめこほしいな」といいました。

夜になつて、どんどん戸をたたくものがありました。

「だれだ」

「わたしは、ひるまのしがまでございます」とこたえました。男は戸をあけて

「さあさあ入えれや、ところで何しにきたね」

とたずねました。しがまは

「よめこがほしいといつてたのできました。気にいらねえすか」

といいました。

「いやいや、気にいつたず。入つてけれ」

と家に入れ、それからふうふになつてくらしました。しがまのよめこは、何でもよくできましたがただお湯だけが大きらいで、いく日たつてもお湯に行きません。男はとなりのおかみさんに

「うちのよめこは、湯さつれていつてけへんか」とたのみました。

となりのおかみさんは、いやがるよめこを風呂に入れました。ところがそれつきりなんの音もしません。あまりふしぎなので戸をあけてみますと、中にはだれもおらず、風呂おけにはしがまのよめこがさしていた、くしとこうがいがうかんでいたということです。

その二

むかし、ひとりもののわかい男がありました。ある冬のこと、ふぶきのはげしいばんのことです。外で人のけはいがするので戸をあけてみると、みたこともないわかい女がたおれていました。

「もしもし、どうしたんです」

と男は女をだきおこすと家に入れてかいほうしました。女はやがてよくなりました。

「助けていただいたお礼に、何なりといつてください」

といいましたので、男はよめさんになつてくれといいました。そして二人はたつしやで仲よくくらしていましたが春になつてあたたかくなると、その女はだんだんとやせて元気がなくなつてきました。

ある日、男の友だちがあそびにきましたので、女はごちそうをつくるためにいそがしく立ちはたらきました。しばらくたつて男は、ごちそうができたころだろうと女をよびましたが、へんじがありません。どうしたのだろうとおもつて台所にいつてみますと、かまどの前にびしよびしよにぬれた女のきものだけがそつくり残つていたそうです。

(おわり)